

健康生活学部開設記念号の発刊によせて

学長 滝川 嘉彦

1956年(昭和31年)創立者滝川一益先生が、若い人々に強健な身体と素朴雄渾な精神を養い育てると共に高い教養と優秀な技術を身につけさせたいと念願し本学の前身である名古屋栄養専門学院を創設してから47年が経つ。この間時代の要請に応じて様々な変貌を遂げてきたが、学園を取り巻く環境がどのように変化しても、次の半世紀も名古屋文理が営々として求める者の学び舎であり続けるために、我々はもう一度原点に立ち返ることにした。本学は「健康、栄養、食、そして情報」を教育研究の柱とし、これらを目指す全ての学生に門戸を開き、さらにその教育研究の成果を地元還元する方針である。その第一歩が名古屋文理大学健康生活学部・健康栄養学科の開設である。健康生活学部誕生を記念した本紀要は大学の紀要としては4号目にあたるが、1976年(昭和51年)にそれまでの生活科学ノートが紀要として再出刊を遂げてから27年目にして初めて、我々の向かうべき教育研究の方向を示した記念すべき紀要となった。

想えば本学の母体であった野原研究所(渡辺製菓グループ)は戦時中の軍民の栄養補給に尽くした研究機関であった。その後財団法人食糧科学研究所に改名してからも栄養士養成を通じた栄養研究の実践の場であった。当時の研究所の目的には以下のように記されていた。「本財団法人は農業化学、薬化学、農業経済及び産業経営・生活管理の研究(農業化学及び薬化学製品の創製を含む)を行い並びにその研究成果に付き教育講習を行う施設学校を経営することを目的とするための事業を行う。(後半略)」

そこにはこれまで日本では希薄だった「栄養」という概念に対する認識はこのようであったかと思わされる記述が数多くある。この目的が記された紀要第1号にあたる「20周年記念号」からは当時の栄養学の研究者たちの気概と勢いを読み取ることができるとともに、先達の轍があったからこそ現在の我々があるのだということを思わずにはいられない。「草創と守勢いずれが難きや。」我々は既に半世紀あまりの歴史の上にいる。たとえ守勢が棘の道であるとしても草創の先達の想い(建学の精神)の実現に向けこれからは教職員全員と手を携えて前進あるのみである。

最後に紀要第1号に記された学長の言葉を引用してこの記念すべき紀要のまとめとしたい。当時の気概と勢いを取り戻すきっかけとなることを願って。

「本学は栄養教育を通して知識技術を磨き、品性を高め、正しい歴史観と人生観を培い、世界から信頼される日本人を作る場である。」

初代学長 滝川一益先生書